

第三章 明石の君の物語 結婚の喜びと嘆きの物語

[第一段 明石の侘び住まい]

明石には、例の(明石では相変わらず)、秋、浜風のことなるに(秋になって浜風が強くなり変わっても進展が無く)、一人寝もまめやかにものわびしうて(源氏は一人寝が切実に物侘しくて)、入道にも折々語らはせたまふ(入道にも時々御話しなさいます)。

「とかく紛らはして(何とか工夫して)、こち参らせよ(娘御から此方に来るように差し向けてくれ)」とのたまひて(と仰って)、渡りたまはむことをばあるまじう思したるを(源氏のほうから岡辺に御渡りになることなど無いように御思いなのを)、正身はた(娘御のほうはまた)、さらに思ひ立つべくもあらず(さらさら出向く素振りはありません)。

「いと口惜しき際の田舎人こそ(まるで取るに足りない身分の田舎者は)、仮に下りたる人のうちとけ言につきて(一時的に下向した人の誘い文句に乗って)、さやうに軽らかに語らふわざをもすなれ(中には気軽に睦み合う事があるかも知れないが)、人数にも(ひとかずにも、まともな相手とは)思されざらむものゆゑ(見做されないだろうから)、我はいみじきもの思ひをや添へむ(自分は結局つらい思いを味わう事になるだろう)。

かく及びなき心を思へる親たちも(叶わぬ高望みをしている親たちも)、世籠もりて過ぐす年月こそ(君の御目に触れずに埋もれて過ごしていた内は)、あいな頼みに(身の程知らずの願い事に)、行く末心にくく思ふらめ(行く末を楽しみに思うのだろうが)、なかなかなる心をや尽くさむ(実際の分に過ぎた婚姻には大変な気遣いをする事だろう)」と思ひて(と姫は考えて)、

「ただこの浦におはせむほど(君がただこの浦にいらっしゃる間だけは)、かかる御文ばかりを聞こえかはさむこそ(こうした恋遊びのお手紙だけを交わすには)、おろかならね(有難い事です)。年ごろ音にのみ聞きて(何年も噂に聞いて)、いつかは然る人の御ありさまをほのかにも見奉らむなど(みたてまつらむなど、拝見したいと思っていたところ)、思ひかけざりし御住まいにて(思いがけない当地での仮住まいで)、まほならねど(斜見ではあっても)ほのかにも見たてまつり(少しは顔を拝見し)、世になきものと聞き伝へし(見事な腕前と伝え聞いた)御琴の音をも風につけて聞き、明け暮れの御ありさまおぼつかなからで(日頃の暮らしぶりも詳しく聞いて)、かくまで世にあるものと思し(こうまで私を認めてくださり)尋ぬるなどこそ(お誘い下さるなどとは)、かかる海人のなかに朽ちぬる(このような海辺育ちの田舎者には)身にあまることなれ(身に余る光栄です)」など思ふに、いよいよ恥づかしうて(ますます気後れして)、つゆも気近きことは思ひ寄らず(お側に上る事は全く思い寄りませんでした)。

親たちは(両親は)、ここの年の祈りの叶ふべきを思ひながら(長年の念願が叶いそうだと思ひながら)、「ゆくりかに見せたてまつりて(成り行き的情事の果てに)、思し数まへざらむ時(源氏のお気に召さない時は)、いかなる嘆きをかせむ(娘がどんなに悲しむだろう)」と思ひやるに(と思うと)、ゆゆしくて(ひどく気掛かりになって)、

「めでたき人と聞こゆとも(いくら立派な方とは申せ)、つらういみじうもあるべきかな(それは辛く悲しい事というべきだろう)。目にも見えぬ仏、神を頼みたてまつりて(目に見えない仏や神だけを信じて)、人の御心をも、宿世をも知らで(肝心の君の御気持ちや娘の運勢を見失っていた事に為ってしまう)」など、うち返し思ひ乱れたり(この期に及んでの取り越し苦勞に胸を痛めていました)。

君は(そして源氏の君はと言えば)、「このころの波の音に(この秋めいた波の音に)、かの物の音を聞かばや(かの娘御の琵琶を聞こうではないか)。さらずは(そうでなければ)、かひなくこそ(折角の風情の甲斐が無くて、波に貝がないのは海辺だけに残念だ)」など、常はのたまふ(いつも冗談半分に仰います)。

[第二段 明石の君を初めて訪ねる]

忍びて(入道は人目を避けて)吉しき日見て(よろしきひみて、吉日を調べて)、母君のとかく思ひわづらふを聞き入れず(母親がとかく心配するのを尻目に)、弟子どもなどにだに知らせず(弟子たちなどに任せる事も無く)、心一つに立ちゐ(自分の考えで指図して)、かかやくばかりしつらひて(家を輝くばかりに飾り立てて)、*十三日の月のはなやかにさし出でたるに、ただ「*あたら夜(岡辺でお月見を致します)」と聞こえたり(と海辺の源氏に手紙でお知らせ申しました)。*八月十三日は当時の宣明暦では満月だったらしい。という事は月齢十五日なので、ざっくりと出を 19:00、入りを 5:00 と見当つけて置く。 *注に<入道の文。「あたら夜の月と花とを同じくは心知れらむ人に見せばや」(後撰集春下、一〇三、源信明)を踏まえる。『集成』は「娘を許す意をほのめかす」と注す。>とある。源信明(みなもとのさねあきら)の歌は<折角見事な今夜の月と花なので同せなら風流の分かる人に見せたいものだ>と言い換えられるので、入道が洒落た紹介状の心算なのは分かる。

君は、「好きのさまや(誘ってきたか)」と思せど(と此方から通う形に為るのを心憎くは御思いに為ったが)、御直衣たてまつりひきつくろひて(その気に成って上着を着替えて)、夜更かして出でたまふ(夜遅くにお出掛けになります)。御車は二なく作りたれど(牛車はまたとなく立派に用意されていたが)、所狭しとて(仰々しくなるので)、御馬にて出でたまふ(御馬でお出掛けなさいます)。惟光などばかりをさぶらはせたまふ。

やや遠く入る所なりけり(岡辺の家は幾らか高く山を登った処でした)。道のほども、四方の浦々見わたしたまひて(道すがら四方の海が見渡せて)、思ふどち見まほしき(恋人と見たいような)入江の月影にも、まづ恋しき人の御ことを(先ず二条院の妻の事を)思ひ出できこえたまふに(思い出されなさって)、やがて馬引き過ぎて(そのまま馬を引いて岡辺を通り過ぎて)、赴きぬべく思す(京へ向かおうかと御思いに為ります)。

「秋の夜の月毛の駒よ、我が恋ふる雲居を翔れ時の間も見む」(和歌 13-11)

「秋の夜長の束の間に、月毛の駒で見る雲居」(意識 13-11)

*「秋の夜の」は「長さ」の序とすることがある、と古語辞典にある。その「長さ」の中で「時の間も=束の間でもいいから」「見む=会いたい」のは「我が恋ふる(わがこふる)」「雲居=宮処、に居る妻」と言う次第。でも実際は、いくら「秋

の夜長」と言っても明石から京へ一夜で行ける筈も無い。それでも満月の「秋の月」の名月は「飽き＝満ち足りた＝万能」の月なのだから、其の光りを受けた「月毛の駒」なら「雲居を翔れ時の間も＝瞬く間に空を飛んで」「我が恋ふる雲居を時の間も見む」事を叶えてくれるだろう、と言う夢物語。「翔れ(かけれ、空を飛べ)」と言った時点で、詠み手には「夢」の自覚はあるだろうから、「見む」が「会おう」という能動体では無く「会いたい」という期待感になる。重ね言葉を多用した複雑な歌だが、一読して全体の気分は直感できる出来栄で、源氏本人は「うちひとりごたれたま」って見事だと自負しているかの描写。尚、「月毛の駒」は赤毛が白髪交じりになった馬で、「つき」は鳥のトキの古名とあり、其の馬の毛並みがトキの羽の裏に似ている事から来た言い方、と古語辞典にある。

と、うちひとりごたれたまふ(ふと独り言を為さいます)。

造れるさま(岡辺の邸の佇まいは)、木深く、いたき所まさりて(手入れの行き届いた所が多くて)、見どころある住まひなり(見事な住まいでした)。海のつらはいかめしうおもしろく(海辺の邸は絢爛豪華だが)、これは心細く住みたるさま(此方は物寂しい暮らしぶりで)、「ここにゐて(此処の暮らしで)、思ひ残すことはあらず(物足りなくないのだろうか)」と、思しやらるるに(と想像なされると)、ものあはれなり(感慨深いものでした)。三昧堂近くて(入道の念仏を上げるお堂が近くにあつて)、鐘の声、松風に響きあひて、もの悲しう、岩に生ひたる松の根ざしも(岩に生えている松の根の張り具合も)、心ばへあるさまなり(風情有りました)。前栽どもに虫の声を尽くしたり。ここかしこのありさまなど御覧ず。

娘住ませたる方は、心ことに磨きて(一段と美しく掃き清められて)、月入れたる真木の戸口(月の光りが差し込んだ檜の妻戸が)、けしきばかり押し開けたり(部屋の中を覗けるほど少し押し開けて在りました)。うちやすらひ(源氏は其の戸口から庇に上がりこんで)、何かとのたまふにも(姫にお声をお掛けになりましたが)、

「かうまでは見えたてまつらじ(普通このように他人の部屋に不仕付けには上がり込み為さらないものだろう)」と深く思ふに(と実体験の無い姫は心を閉ざして)、もの嘆かしうて(困り果てて)、うちとけぬ心ざまを(打ち解けない様子でいるのを)、

「こよなうも人めきたるかな(ずいぶんとお高くとまっているな)。さしもあるまじき(そうは馴れ馴れしく出来ない)際の人だに(高い身分の女でさえ)、かばかり言ひ寄りぬれば(私がこのように言い寄ろうものなら)、心強うしもあらずならひたりしを(強情を張ってなどいられないものを)、いとかくやつれたるに(こうも酷く落ちぶれてしまったので)、あなづらはしきにや(侮られているのだろうか)」とねたう(と源氏は痛に障って)、さまさまに思し悩めり(変に勘繰って御出ででした)。

「情けなうおし立たむも(腕づくで押し倒すのも)、ことのさまに違へり(私らしく無い)。心比べに負けむこそ(根負けしたとあつては)、人悪ろけれ(人聞きも悪い)」など、乱れ怨みたまふさま(思うに任せず悶々と為さる源氏の艶姿こそ)、げにもの思ひ知らむ人にこそ見せまほしけれ(全く以って其れこそ京の風流人に御見せ致したい処で御座いました)。

近き几帳の紐に(側の几帳の紐が風で揺れて)、箏の琴の弾き鳴らされたるも(十三間の音がしたのも)、けはひしどけなく(普段の様子で)、うちとけながら搔きまさぐりけるほど(ついさっき

まで寛いで弾いていたらしい事が)見えてをかしければ(窺がえて楽しく為り)、「この、聞きならしたる琴をさへや(噂に聞いた腕前の琴だけでも、御聞きしたいものですね)」など、よろづにのたまふ(何くれと源氏は御話しになります。そして次の歌を交わしました)。

「むつごとを語りあはせむ人もがな、憂き世の夢もなかば覚むやと」(和歌 13-12)

「寝物語の柔肌で、そつと慰めてくれないか」(意識 13-12)

*この源氏の贈歌はざっと見て、ベタな口説き文句に思える。男と女の「睦言」は<寝物語>。「もがな」は<くだつたらいいのに>という願望句。「憂き世の夢」は<現実の辛い思い>で、此処での「夢も覚む」は<悲しみが慰められる>の意。通せば、<寝物語の相手が欲しい、旅寝の憂さを慰めて欲しいから>という率直さ。この期に及べば、直球勝負だ。今でも「したい、やらせる」よりはせめて、このくらいは言うべきだろうか。

「明けぬ夜にやがて惑へる心には、いづれを夢とわきて語らむ」(和歌 13-13)

「日陰暮らしの女には、夢も現も暗い闇」(意識 13-13)

*この姫の返歌には、初々しい用心深さよりは纏まりの良い手慣れ感がある。教養が高いとも言えそうだが、こと男女の仲に於いては耳年増ぶりが目立つ。「明けぬ夜に」は、夜伽を勤めても遊び女のままで<日の目を見ないので>、「やがて惑へる心には=やがては辛い思いをして」、「いづれを夢とわきて語らむ=いづれにしても泣きを見る」、という理屈っぽさ。でも、生娘の強がりと思えば愛しい。

ほのかなるけはひ(奥ゆかしく気持ちをはのめかす姫の様子は)、伊勢の御息所にいとようおぼえたり(伊勢に行かれた御息所にととてもよく似ていると源氏は御思いになりました)。何心もなくうちとけてあたりけるを(姫は何の心積もりも無く寛いでいた所に)、かうものおぼえぬに(このような意外な事態となって)、いとわりなくて(分けが判らずとても困って)、近かりける(近くの)曹司(ざうし、控え室)の内に入りて、いかで固めけるにか(襖を何とか固く押さえ付けて塞いでいたが)、いと強きを(余りに必死だったので)、しひてもおし立ちたまはぬさまなり(源氏は無理に抉じ開けようとは為さませんでした)。されど(しかし姫がいつまでも)、さのみもいかでかあらむ(そうして居られる筈ありません、やがて源氏も中へ入りました)。

人ざま(姫の見た目は)、いとあてに(とても上品で)、そびえて(背が高く)、心恥づかしきけはひぞしたる(恥づかしがっていました)、かうあながちなりける契りを(まるで一方的に源氏が姫の体を貪って弄られて開いた女陰に熱くなった男根を挿し込んだ今の情交に)思すにも、浅からずあはれなり(源氏は深い満足を覚え為さったので)、御心ざしの、近まさりするなるべし(姫は思った以上に具合の良い女だったので)、

常は厭はしき夜の長さも(日頃はうんざりする夜の長さも)、とく明けぬる心地すれば(早く明けてしまいそうな気分がして)、「人に知られじ(意外なほど姫を気に入った自分の気持ちが気恥づかしく、誰にも気付かれたく無い)」と思すも(と源氏は御思いになると)、心あわたたしうて(夜明けて人目に付く事が無いようにと慌て気味で)、こまかに語らひ置きて(姫には大事にすると約束して)、出でたまひぬ(御帰りになりました)。

御文(後朝のお手紙は)、いと忍びてぞ今日はある(今日は本当に人目を忍んで差し上げます)。あいなき御心の鬼なりや(本気になってしまったからこそ、どうしても源氏は二条院の君に対する良心の呵責を覚えたのです)。ここにも(入道のほうも源氏の意向に従って婚儀が無事に整うように)、かかることいかで漏らさじとつつみて(この件を何とか外部に知られないように隠す為に)、御使ことことしうももてなさぬを(使者を盛大に持て成さないのを)、*胸いたく思へり(物足り無く思いました)。 *注に<『集成』は「入道は残念に思っている。結婚第一夜の後朝の文の使いは盛大にもてなすしきたりであった」。>とある。

かくて後は(その後は)、忍びつつ時々おはす(人目を忍んで時々御通いになります)。「ほどもすこし離れたるに(海辺から岡辺までは少し距離があるので)、おのづからもの言ひさがなき海人の子もや(どうしてもおしゃべりな地元の者などに)立ちまじらむ(見つかる事もあるだろう)」と思し憚るほどを(と御思いに為って出向くのをお止めに為ったりすると)、「さればよ(やはり遊びだったのでしょうか)」と思ひ嘆きたるを(と姫が思い嘆くのを)、「げに、いかならむ(本当にどうなることやら)」と、入道も極楽の願ひをば忘れて(入道も自分の極楽往生の念仏行など忘れて)、ただこの御けしきを待つことにはす(ただ君の御通いを待つ事ばかりをしています)。今さらに心を乱るも(今さら然様に入道が動揺するというのも)、いといとほしげなり(とても気の毒そうなことでした)。

[第三段 紫の君に手紙]

二条の君の、風の一つにも漏り聞きたまはむことは(風の便りにでもこの事を御聞き付けに為る様な事があれば)、「たはぶれにても(相手が遊びの女でも)、心の隔てありけると(気持ちが離れていると)、思ひ疎まれたてまつらむ(思っで悲しみなさるだろうと)、心苦しう恥づかしう(可哀相で気後れに)」思さるるも(御思いに為るのも)、*あながちなる御心ざしのほどなりかし(並々ならぬ妻への信頼からでした)。 *この源氏の気持ちは、世の、少なくとも今の日本の多くの男の、女房が怖いという気持ちと、共通する所があるような気がする。家の経営を全幅の信頼を置いて女房に任せている男にとって、その信頼関係を損なうのは恐怖である。信頼はお互い様だが、家を守る女房の役割と打って出る亭主の役割とでは、自ずから相当な違いがある。打って出る方はダメモトだが、守るほうはヤッテナンボなので、夫は妻に人としての責任の大部分を担ってもらう形に為る。勿論、先を見れば守るだけではジリ貧なので、妻も夫の可能性に期待はする。理屈の上では相互補完である。相手があって一人前なので一心同体と見做す事も出来る。という事は、其々が自らの生を全うする事は互いに補完者有るの事であり補完者の生の為にもなるので、男は女の為に生き、女は男の為に生きる、ともいえる。それが実感できた時の合合理性は生きる意味に合致するので、恐らくは脳内で相当な快楽物質を放出させるに違いない。そして其れが切実な問題だけに、絶えず反復確認、フィードバックをして合合理性を求め続けるだろう。確認出来れば更に快楽物質を出すか少なくとも制御物質は出さないが、確認出来なければ制御物質か不快物質を出して自己防衛するだろう。少し飛躍して言えば、是は男女関係だけでなく、およそ全ての人間関係を形作る基本的な仕組みとも思え、また麻薬が論理破綻を生じさせて廃人化させる由縁かとも思う。しかし、其れも此れも今の暮らし有るの事である。そして可能性を追求するにはヤンチャも必要なので、男は色々な危険性を身に覚える。で、女は怖い。

「かかる方のことをば(私の浮気癖だけは)、さすがに(大人しい妻もさすがに)、心とどめて怨みたまへりし折々(気にして悲しく憤り為さる事が幾つもあったが)、などて(どうして)、あやな

き(場当たりの)すさびごとにつけても(成り行きに任せて)、さ思はれたてまつりけむ(そのように妻を傷付け申してしまったのだろう)」など、取り返さまほしう(過去を取り返したい気持ちで)、人のありさまを見たまふにつけても(しがらみの無い姫の姿を御覧に為っても)、恋しさの慰む方なければ(妻を忘れる事は出来に為らなかった)、例よりも御文こまやかに書きたまひて(普段よりも丁寧に二条の君へ御手紙をお書きに為って)、

「まことや(いや是は)、我ながら心より外なるなほざりごとにて(我ながら軽率な行き擦りの恋で)、疎まれたてまつりし節々を(疎まれ致したいくつかの過去の出来事を)、思ひ出づるさへ胸いたきに(思い出すのさえ悔やまれますのに)、また、あやしう(また此処で何とも)ものはかなき夢をこそ見はべしりか(取るに足らない出来心を起こしました)。かう聞こゆる問はず語りに(こう告白いたしますので)、隔てなき心のほどは思し合はせよ(隠し立ての無い胸中をお察し下さい)。『*誓ひしことも(神に誓っても)』」など書いて、 *注に<「忘れじと誓ひし事を過たず(あやまたず、背いた事は無い)三笠の山の神も判れ(ことわれ、判ってくれている)」(出典未詳)を踏まえる。>とある。源氏は以前に亡き先妻の左大臣家の姫にも、白状するから許してくれという態度を何度か見せていたが、其れは男の身勝手な理屈だ。または、女が男に行状を言わせようとして、素直に言えば許すとか言う口車に乗って、凶に乗った男が出すボロだ。女は男の裏切りが許せないのだから、男は白を切るか、ある種の距離感を持って女の諦観を待つ以外に、事を収める術は無い。距離感も無しに下吐すれば、火に油である。是を男が間違えやすいのは、男には女を裏切る心算が無い事に原因する。男は其の気に為りたい事が元気の源であり、其の気に為れば種付けするように生理する仕組みを持っている。その結果として、相手の女と信頼関係を持つようになれば、前の女を裏切る事になるかも知れない。それでも、裏切る心算は無いままだ。ただ普通の男は、其処で引き起こされる面倒な事態を処理しきれないので、裏切るかどうか以前に自分の力量を鑑みて自粛するか、自粛せざるを得ない。いや、良く分からないが多分そうなのだろう。ところで、三笠山は春日大社(768年)の霊山で今でも禁足の奈良の小山ということだが、白村江の敗戦(663年)以前には太宰府天満宮の背後にそびえる宝満山(ほうまんざん)の事を言ったらしく、Webサイトの写真で見ても福岡の山のほうが奈良の周囲に埋もれた小山より見映えが良い。

「何事につけても、

しほしほとまづぞ泣かるる、かりそめのみるめは海人のすさびなれども」(和歌 13-14)

所詮寂しい浜暮らし、慰み物が在ったとて」(意識 13-14)

*注に<源氏の紫の君への贈歌。掛詞、「しほしほと」(擬態語)と「塩」、「見る目」(女に逢う)と「海松布」(海草)。縁語、「塩」「刈り」「海松布」「海人」。>とある。また、「まづぞ」は前置きの「何事につけても」を受けているので<とにかくいつも>、「かりそめ」は<刈り初めの>と<仮初め=特に如何という事の無い>、「すさびなれども」は<慰めになったとしても>。其等を踏まえるとこの歌は、「しほしほと(海辺の暮らしで袖がポタポタと潮に濡れるように)まづぞ泣かるる(いつも泣いて暮らしています)、かりそめのみるめは海人のすさびなれども(採り初めの海藻が漁師の好物のように行き擦りの女を慰めにしましたが)」、と云い換えられる。

とある御返り(という源氏のお手紙に対する二条の君のお返事は)、何心なくらうたげに書いて(屈託の無い素直な字で)、「忍びかねたる(隠し切れない)御夢語りにつけても(出来心の打明け話は)、思ひ合はせらるること多かるるを(前にも思い当たる事が沢山在りましたが)、

うらなくも思ひけるかな契りしを、松より波は越えじものぞと」(和歌 13-15)

まさかまさかといいいながら、まさかさまをまっしぐら」(意識 13-15)

*この返歌は前置きを受けるという構成まで源氏の贈歌に倣ったもので、作者の遊び心を感じる。歌自体の理屈からすると「契りしを松より波は越えじものぞと(約束した時にはまさか心移り為さるとは思いもしなかったので)、うらなくも思ひけるかな(特に深い疑いは抱いていませんでした)」という事だろう。是だけなら「うらなくも」はごく一般的に「特には気にしないで、うっかりと」>ぐらいの感じだが、此処では「思ひ合はせらるること多かるを」「うらなくも思ひける」と在って「前科は在ったが敢えて信じた」ということだから、相当な皮肉が込められている。そして、遊び心は更に続いて「うらなくも(浦無くも=海じゃないから)」「波は越えじ(波も立たない)」という言い方に「遊びで明石の浦に居る訳じゃないから、まさか浮気出来る筈が無い」という嫌味を洒落る。この遊び言葉の下敷きは、「末の松山浪越えて」が「名所の松の大木なら高波に呑まれる事は無い筈だが、其れが波を被るほどの意外な出来事」という理屈と「波から涙への連想」とで恋歌では「心変わり」の常套句として用いられる事にある。ところで「末の松山」は末摘花の巻でも、源氏が初めて常陸宮の姫の赤鼻を見た朝の帰り際に、庭の松から雪が落ちた場面にも引かれていたが、常陸宮は父帝の縁故であり明石入道は母方の縁故であり、この二つの巻には何処か通じる何かがあるのかも知れない。「正身(さうじみ、しゃうじん)」の語が共に用いられることも印象的だ。

おいらかなるものから(おっとりした語り口ながら)、ただならずかすめたまへるを(二条の君が穏やかでは無い気持ちを滲ませなさっているのを)、いとあはれに(源氏は愛しく感じ入って)、うち置きがたく見たまひて(そのまま見過ごす事が出来に為らずに)、名残久しう(いつまでも尾を引いて)、忍びの旅寝もしたまはず(岡辺への忍び通いも為さしません)。

[第四段 明石の君の嘆き]

女(源氏の女と為った明石入道の姫は)、思ひしもしるきに(通いの途絶えをやはり田舎の遊び女にされたと思ひ込んで)、今ぞまことに身も投げつべき心地する(今こそ本当に海に身を沈めたい気持ちでした)。

「行く末短げなる親ばかりを頼もしきものにて(古い先短い親だけを頼りにしては)、いつの世に人並々になるべき身と思はざりしかど(現世で人並み以上の良縁に回り逢う日が来るとは思っていなかったが)、ただそこはかなくて過ぐしつる年月は(ただ夢物語にして過ごしていた年月は)、何ごとをか心をも悩ましけむ(何も特に深刻に思い悩み事は無かった。)、かういみじう(是程切実に)もの思はしき世にこそありけれ(辛いのが現実というものなのだろう)」

と、かねて押し量り思ひしよりも、よろづに悲しけれど、なだらかにもてなして(源氏には格式ある女として取り澄まして接し)、憎からぬさまに見えたてまつる(取り乱して縋り付き申すような真似はしませんでした)。

あはれとは月日に添へて思ひませど(源氏もこの女を日が経つにつれて愛しいと御思いに為っていましたが)、やむごとなき方の(大事な妻が)、おぼつかなくて年月を過ぐしたまひ(心配して年月をお過ごしなさり)、ただならずうち思ひおこせたまふらむが(其の上浮気まで疑わさせ申し

てしまい為さった事が)、いと心苦しければ(本当に申し訳なく)、独り臥しがちにて過ぐしたまふ(一人寝を多くして日を送りなさいました)。

絵をさまざま描き集めて、思ふことどもを書きつけ、返りこと聞くべきさまにしなしたまへり(二条の君からの返事を源氏は楽しみにしていました)。見む人の心に染みぬべきもののさまなり(目にした供人も感心する絵の出来栄えでしたので、)。いかでか、空に通ふ御心ならむ(きつとうまく源氏の思いは届いたのでしょう。)、二条の君も、ものあはれに慰む方なくおぼえたまふ折々(感傷に浸る一人の時間の朝夕に)、同じやうに絵を描き集めたまひつつ、やがて我が御ありさま、日記のやうに書き給へり(かきたまへり、書いて送って来ました)。いかなるべき御さまどもにかあらむ(御二人の絵は一体どの様な物だったのでしょうか)。